

(学童の体型について)

県立広島観音高校 中尾妙子

目的 われわれの食糧資源を有効に利用することは、食物教育上重要な問題であり、食物の摂取過剰のアンバランスが、肥満を導くことについては、既知の事柄でありながら、摂取エネルギーの制御は、専ら標準体重の過不足におかれている。しかし、昨年来の体型の研究の結果、学童の中からは脂肪蓄積の大きいと考えられる肥満体の者は、腹部の計測を追加することによって、より正確に把握できることを認めたので報告する。

方法 前回は幼稚園児の食生活の現状と題して、体型と食生活について報告したが、今回は、学童の体型について、広島市内周辺部の学童、男女それぞれ137名について、皮下脂肪厚をはじめ、身長、体重、胸部及び腹部の周径、前後径、横径を実測し、皮下脂肪厚と各々の計測値、並びに計測値から計算される指数との相関を求めて検討した。

結果 1、従来の標準体重の20%オーバーを肥満とする判定方法は、皮下脂肪厚を実測して検討した結果、学童の場合は、筋性による過体重者の誤認よりも、低体重者の皮下脂肪厚の高い者を見落とし、過食を促進する傾向にあるのではないかと思われる。

2、皮下脂肪厚と最も高い相関の認められる身体部位は腹部の周径であり、前後径は、横径より高い数値である。又、胸部と腹部のそれぞれの測定値の差と、皮下脂肪厚との相関は負であるが、いずれも相関係数は位値である。